

〈史料紹介〉

新収文書

「三坂圭治文庫」―郷土史研究資料

「吉敷服部家文書」―漢学から洋学へ

平 瀬 直 樹

一、「三坂圭治文庫」について

平成七年三月、山口市在住の三坂幸子氏から、夫である故三坂圭治氏の遺品で、故人が生前蓄積した郷土史研究資料の寄贈を受けた。

三坂圭治氏は、戦後の長期間にわたって山口県地方史の発展に多大な貢献を果たしたが、平成五年一月一六日に永眠された(享年八十八才)。三坂氏は、明治三十八年に大正一五年に東京帝国大学文学部に入学、昭和五年に同国史学科を卒業後、公爵毛利家両公伝記編纂所に勤務した。戦後は、山口県に帰り、公立学校長、山口

大学教育学部教授、山口芸術短期大学副学長などを歴任する一方、山口県地方史学会会長として地方史研究団体の育成に努めた。そして、当館との関係で言えば、三坂氏は、「毛利家文庫」の寄託を斡旋することによって山口県文書館を生み、一連の史料復刻の監修を通じて当館を育てあげた大恩人なのである。

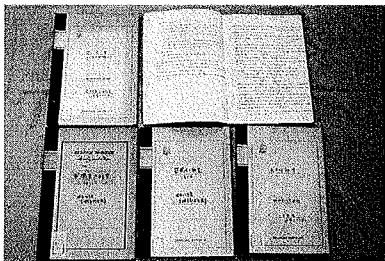
今回寄贈されたものは、大学在学中から晩年に至るまで、自ら記録したり他の研究者から送られた研究資料であり、総点数は一、六二八点である。これらの資料をもとに、三坂氏の営為を通して山口県地方史発展の歴史を



写真A



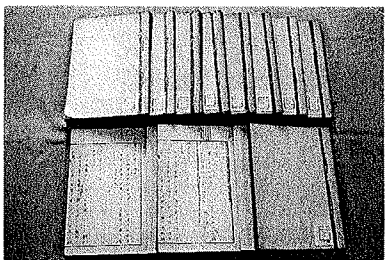
写真C



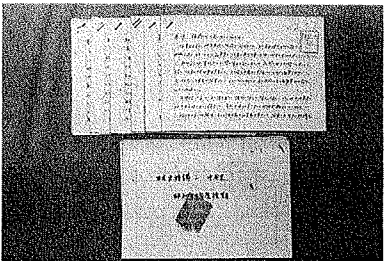
写真E



写真B



写真D



写真F

跡付けることができる。

先ず、文庫の内容は大きく分けて四群に区分することができる。

- ①郷土史研究のための収集資料（小冊子や書籍）
 - ②自らが関わった歴史編纂の原稿（両公伝記編纂所のものおよび戦後に監修した市町村史編纂の原稿）
 - ③東京帝国大学在学時の受講ノート
 - ④山口大学での講義ノートおよび資料
- 次に、文庫の中から①～④の群を代表する六種類の資料を取り上げ、三坂氏の研究活動の一端を紹介したい。

写真A「東京帝国大学在学時の受講ノート」⁽²⁾
 三坂氏の在学中のものであり、黒板勝美、辻善之助、平泉澄、渡辺世祐といった、昭和初頭の東京帝大教授陣による講義が丹念に筆記されている。これらは多数残されておられ、当時の日本史学の動向を知るうえで貴重な資料となっている。

写真B「卒業論文作成のための史料ノート」⁽³⁾

新収文書「三坂圭治文庫」―郷土史研究資料／「吉敷服部家文書」―漢学から洋学へ（平瀬）

これらも在学中のもの。三坂氏は、「中世ニ於ケル海上権」という日本中世の海上交通や海賊を扱った卒業論文⁽⁴⁾を書いている。「海賊研究史料」と題された一連のノートが残されているが、この論文の準備のため記されたものと考えられる。これらのノートの副題には「文書」(一～九)と「記録類」(一～三)とがある。「記録類」のノートには、特に「蔭涼軒日録」や「海東諸国紀」を主としたものがあり、明や朝鮮との関係を重視した研究であることがわかる。

写真C「忠正公伝 原稿」⁽⁵⁾（昭和五年）

戦前、毛利家は幕末の藩主である「両公」、すなわち「忠正公（毛利敬親）」および「忠愛公（毛利元徳）」の伝記編纂事業を行っていた。その頃の原稿が多数残されているが、文面には朱筆で訂正や頭注が緻密に記入され、厳密な校訂が行われていたことがわかる。

写真D「稿本 防府の今昔」⁽⁶⁾（昭和一九年以前）

古典的名著である『周防国府の研究』（昭和八年）を公

刊した三坂氏は、昭和一九年には、平易に防府の歴史を
通覧できる書物を刊行した。これらはその原稿を綴じた
ものである。

写真E「山口大学での講義ノート」(昭和三四年度)
中世から近世にわたる広い範囲の分野に触れられてい
る。

写真F「山口大学での講義用資料カード」
(昭和三七年度)

卒業論文のテーマは戦後も追究され、山口大学の講義
に中世の「海上権」が取り上げられていることがわかる。

三坂氏の山口県内での研究活動について論評すること
はたやすいことではない。三坂氏が監修者あるいは著者
として公刊された書籍は多数にのぼる一方、今回、それ
らを執筆するための資料類が新たに閲覧に供されるわけ
である。今後、この文庫が活用され、山口県地方史の歩
みがより詳しく記述されることを期待したい。

最後に、筆者の興味から気が付いたことに触れておき

卒業論文の頃とは異なる新たな研究課題に向かわせたの
であろう。

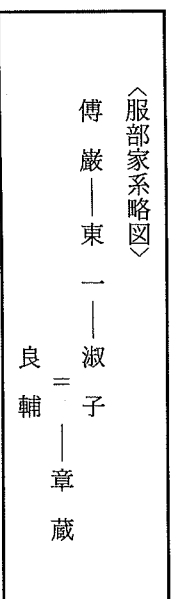
二、「吉敷服部家文書」について

平成七年七月、山口市大字吉敷在住の服部婦美子氏か
ら同家所蔵の文書および蔵書、計七十三点の寄託を受け
た。今回寄託されたのは、昭和四十三年の「山口県農業
発達史料調査」の際に、当時山口県文書館に勤務してい
た田村哲夫氏が調査し、箱に収めて別置していたもので
ある。これ以外にも服部家には文書・典籍が多数伝来し
ているので、あわせてそれらの概要も調査したが、全貌
をつかむに至っていない。同家を訪れることになったき
っかけは、服部章蔵(後述)の研究に取り組んでおられ
る山口市在住の井口卓平氏から、章蔵の生家に文書が伝
来しており、共同で調査することを勧められたからであ
る。

服部家は吉敷毛利氏の家臣で、代々吉敷村(山口市吉

たい。それは、三坂氏が卒業論文を執筆した時期が、同
じ研究室の出身者による、同じく海上交通を取り扱った
二つの重要な業績の中間に位置することである。『中世の
関所』の著者である相田二郎氏は、三坂氏の先輩にあた
り、大正一二年の卒業で、史料編纂所に勤務した。彼の
著書の第五章「中世に於ける海上物資の護送と海賊衆」
で海賊が扱われているが、これは大正一三年に発表した
論文を修補したものである。次に、『中世に於ける水運の
発達』の著者である徳田劔一氏は、三坂氏の後輩にあた
り、昭和七年の卒業で、史料編纂所に勤務した。彼の著
書の第三章「水運の発達に対する障碍」の第二節「海賊
の跳梁」で海賊が扱われている。三坂氏が、在学中に、
相田・徳田両氏とどのような学問的交流があったのかは
不明である。そして、卒業論文の成果が、その後どのよ
うな形で公にされたのか、筆者にはつかめていない。お
そらく、上山満之進(周防国府の研究)の執筆を勧めた)
や毛利家史編纂関係者との新たな出会いが、三坂氏を、

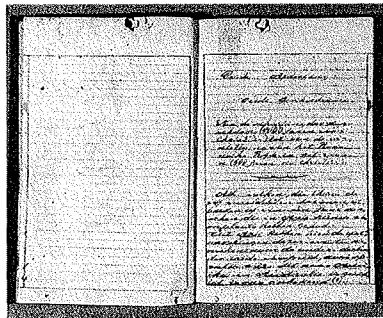
敷)に住み、学者を輩出し、明治に至った。今回寄託さ
れた蔵書にはしばしば銘が記され、そこに見える服部家
の人名は、主として、傳蔵、その孫淑子、その子章蔵で
ある。



傳蔵は、明和八年(一七七二)生まれ。吉敷毛利氏に対
し、文武を学ぶ学校を建設することを建議し、文化二年
(一八〇五)に憲章館が創建された。彼はその初代学頭
となり、漢学を教え、嘉永四年(一八五一)に亡くなっ
た。憲章館の敷地は現在の良城小学校の敷地である。

淑子は文政十一年(一八二八)生まれ。祖父傳蔵から
和漢の字を学び、それを子どもたちに受け継がせること
に尽力し、明治四三年(一九一〇)に亡くなった。

章蔵は嘉永元年(一八四八)に生まれ、大正五年(一



資料A

佐々井村内

田六町彦段 門田名

田式町 為助名

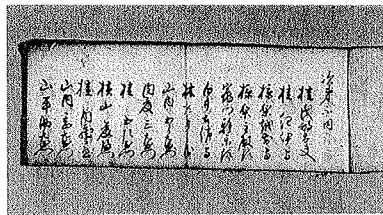
田式町七段 元宗名

右之地、隆元判形之旨、無相違宛
行候、全有知行、諸公役等堅固可
勤事肝要候、仍一行如件

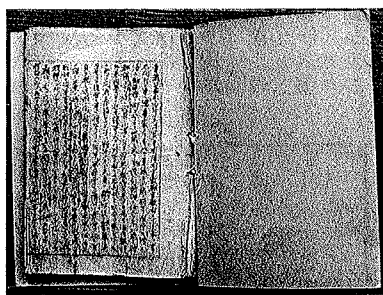
資料B

永禄十二年十二月十日輝元（花押）

桂少輔五郎殿



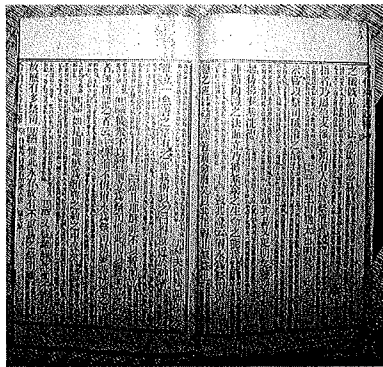
資料C



資料D



資料E



資料F

九一六）に亡くなった。実家で漢学を学んだのち、維新戦争期は兵学寮（山口）で蘭学を学び、維新後は英学を学んで海軍兵学寮の教授を務めた。その間英学を通じてキリスト教（新教）に出会い、明治一二年、海軍兵学寮を辞め、伝道者になって布教に従事した。山口と広島に教会を創設する一方、女子教育にも尽力し、山口に光城女学院を創設した。のちにこの学校は、長崎にあった梅香崎女学院と合併して梅光女学院となるので、章蔵は梅光女学院の創設者とされている。

漢学の家柄であった服部家からキリスト教の伝道者が輩出する現象は、歴史的に興味深いと考えられる。章蔵の生涯は、日本の近代化の歩みと同時並行であるが、彼の洋学は、キリスト教という精神文化にまで行き着いたということができているのではないだろうか。

吉敷村からは章蔵のほかにもキリスト教（新教）の伝道者が輩出（15）しており、澤山保羅（梅花女子大の創始者）や成瀬仁蔵（日本女子大の創始者）が有名である。また、

明治時代の「唱歌」が、実はプロテスタント系の賛美歌をもとにして作られたという研究（16）もあり、維新直後の日本社会へのキリスト教の影響力は決して小さくはなかったと考えられる。

以下には傳蔵、淑子、章蔵の用いた書物のうち特徴的なものを取り上げる。これらの書物から近代化の途上にある日本人が、漢学から洋学に移行していった姿の一端がうかがえるのではないだろうか。

- ① 「傳蔵先生詩集」 二冊 文化元年
- 「傳蔵先生文集」 一冊

ともに傳蔵の漢学の素養を窺うことのできるものである。漢文という当時最高の教養が必要な表現形態であるが、詩集・文集ともに、吉敷郡内の景色や友人との交流といった、身近のことを題材としており、親しみを

- ② 「詩草集」 一冊
- 「女中庸」 二冊

ともに傳蔵の孫であつた淑子の所持品である。「女中庸」

は手習い本であり、文字を覚えると同時に当時の女性

道徳を修養する目的があつたと考えられる。一方、「詩

草藁」は漢詩集で、淑子は、日常の読み書き以上に、

漢学の素養も身に付けていたことがわかる。

③「洋学須知」三冊 慶応二年 伊藤朴斎訳

「洋学」といっても、内容はオランダ語学である。お

そらく章蔵が大村益次郎の兵学寮で学んだ際の教科書

であつたと考えられる。

④「ALGEMEENE GESCHIEDENIS

ZE STIENDE DRUK」(万国歴史)²²

一冊 一八六五年(資料A)

これも兵学寮で学んだ際の教科書であつたと考えられ

るが、筆写本であり、勉学の労苦がしのばれる。

⑤「数学教授書」一冊 明治六年 海軍兵学寮刊

章蔵が教授をしていた海軍兵学寮(海軍兵学校の前身)

で使用した教科書と考えられる。

以下には、服部家の学問研鑽に関係するもの以外に、興味深い文書が含まれているので紹介する。

⑥「毛利輝元知行安堵状」一通 永祿二年(資料B)

これは服部家本来のものではなく、章蔵の妻の実家が

同じく吉敷毛利氏家臣の桂家の出身であり、そこから

もたらされたものと言われている。「桂少輔五郎」は桂

広繁(快友)のことで、彼の子孫は、吉敷毛利と長府

毛利を補佐する二つの家に分かれた。佐々井は広島県

高田郡八千代町にある地名である。文中に見える「隆

元判形之旨」というのは、天文一九(一五五〇)年に

毛利隆元からこの土地を充行われた文書のことを指し

ている。

⑦「秀包公御家頼侍附立」一冊(長帳)(資料C)

表紙から、これは、慶長二十年林鐘上旬の附立で、明

和元年十一月廿八日に片山四郎右衛門尉藤原祐義が写

したものであることがわかる。「秀包公」というのは毛

利秀包のことである。彼は毛利元就の末子で、はじめ

小早川隆景の養子になつたが、のち毛利に復して周防

国吉敷村を知行地として与えられ、代々毛利本藩の最

上級家臣である「一門」として加判衆に列した。これ

に類するような史料は、当館蔵「毛利家文庫」や同じ

く「吉敷毛利家文書」には見あたらず、藩政初期にお

ける「一門」家臣団が窺える史料として貴重なもので

はないかと考えられる。本文の冒頭に「次第不同」と

あり、以下家臣の姓名のみが列記され、石高はともな

っていない。

⑧「吉敷村士族就産資金組合同約」一冊

明治三十二年

維新後、武士は禄を離れて新たな生業を求めなければ

ならなくなつたが、吉敷村在籍の士族は、相互扶助のた

め資金を融通する組合を結成した。総則の第二條には「当

組合ハ金銭ヲ貸付ケテ利倍増殖シ有價債券ヲ売買シ及ヒ

山林ノ毛上ヲ売却シテ利益ヲ計リ以テ士族就産ノ資金ヲ

作ルヲ以テ目的トス」とある。

次は、服部家にまだ残されている文書・蔵書に言及し

たい。従来から章蔵に関する根本史料とされてきた「服

部章蔵自伝」²³の原本(資料D)はこれらの中に含まれて

いる。筆者が特に興味を持ったのは、清朝末期に香港で

出版された漢訳の聖書およびその注釈書が多数残されて

いることである。これらすべてを調査したわけではない

が、筆者は同治五年(一八六六)の「新約全書」や同治

七年(一八六八)の「馬可(マルコ)福音註釋」(資料E)

を目にした。一連の出版が清朝の同治年間に限られるな

らば、ちょうど章蔵がキリスト教を学ぶ頃に取り寄せた

ものと考えることができる。日本での『新約聖書』の完

訳は明治十七年とされているが、それまでの間、ちょう

ど章蔵がキリスト教に出会った時期に、日本語で聖書を

読むことは困難であつた。そこで、和訳が不十分である

ならば、漢訳を取り寄せることは要領の良い学習法であ

つたと考えられる。特に、章蔵の場合は、漢学の素養を

活かせば独力でも学習可能であろう。これらの聖書類に

は朱で書き込みがある（資料F）。もし、章蔵がキリスト教を学習する際に漢学の力が活かされたのならば、これら漢訳聖書類は、日本の近代初頭における漢学と洋学の

関係を知るための新たな史料ということになるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 三坂氏の経歴については、『現代山口の100人』
〔読売新聞山口支局編集、一九七三年〕および八木充
「名誉会長 三坂圭治先生を悼む」〔山口県地方史研
究〕第七号、一九九四年）参照。
- (2) 山口県文書館の架蔵番号五〇一〜五四六番。
- (3) 架蔵番号五四七〜五六六番。
- (4) 架蔵番号七二二番。
- (5) 架蔵番号一〇三〇番。
- (6) 架蔵番号四八五〜四九五番。
- (7) 架蔵番号五九一〜五九五番。
- (8) 架蔵番号七三六・七三七番。
- (9) 〔歌傍書房、一九四三年〕。
- (10) 『歴史地理』四五―一に掲載。
- (11) 〔章華社、一九三六年〕。
- (12) 以下、服部家の人物については、『山口市史』（山口
市、一九八二年）および『吉敷村史』（三坂圭治編輯、
一九三七年）参照。
- (13) 章蔵については、『吉敷地区郷土誌』第二〇輯（人物
篇4）一服部章蔵自伝（自歴と伝道）（高橋文雄編輯、
山口市吉敷公民館発行、一九六〇年）参照。
- (14) 黒木五郎『梅光女学院史』（下関梅光女学院発行、一
九三四年）
- (15) 同じ地域、しかも維新の原動力となった長州藩の中
央部で、明治期に相次いでキリスト教（新教）の指導
者が輩出するのはどういう現象として説明したらよい

のであろうか。ここで、この問題をテーマとした論文

社、一九九三年）参照。

- (17) 架蔵番号四。
- (18) 架蔵番号六。
- (19) 架蔵番号二三。
- (20) 架蔵番号二四。
- (21) 架蔵番号三一。
- (22) 架蔵番号三二。
- (23) 架蔵番号三〇。
- (24) 架蔵番号一。
- (25) 『角川日本地名大辞典・34広島県』所収「佐々井」
の項目参照。
- (26) 架蔵番号二。
- (27) 架蔵番号三。
- (28) 活字化されたものが、注（13）文献である。

(16) 安田寛『唱歌と十字架 明治音楽事始め』（音楽之友
社）脱稿後、川島二郎・土岐健治「初期日本語訳聖書と中国語訳聖書」（『聖書の世界・総解説』、自由国民社発行、一九
九四年）があることを知った。これによれば、一八二〇年代初頭から七〇年代までの半世紀余の間に刊行された古典的
文体の漢訳聖書は、漢文の素養のある日本の知識層が理解し得るものであったという。